

日本大学桜門建築会

2010-March
No.87

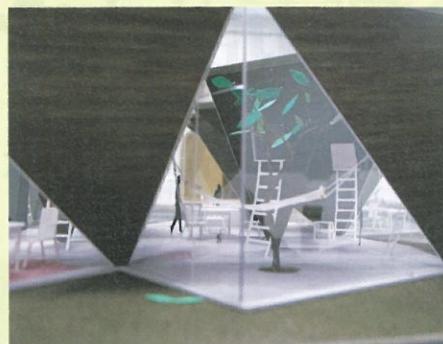
桜建会報



第1回桜建会学生コンペ最優秀賞「ametomo」重野陽祐・清水良輔・鈴木章弘



同・優秀賞「森と森の居候」山中友希



同・優秀賞「サンカクの木屋」松岡伸明



同・東ガスSUMIKA賞「とりどりの住処」細矢祥太・益山未樹

<http://www.okenkai.jp/>

contents

特集／日大建築山脈[都市計画系]

山脈図&インタビュー

小嶋勝衛前日本大学総長×三浦金作教授—2

研究室紹介／沿岸域工学研究室 曽根研究室・亀井研究室—8
計報—9

トピックス／第1回桜建会学生設計コンペティション結果報告—10
事務局だより—12

2009年度斎藤賞・加藤賞・桜建賞受賞者一覧—14
学部ニュース—15

特集 日大建築山脈 [都市計画系]

今号では、都市計画系を取り上げました。山脈図は佐野利器先生より始まり、工学部、生産工学部もひとつながりになっています。

インタビューした先生は昨年定年退職をされた小嶋勝衛先生です。先生は退職するにあたり、永年研究室で研鑽された研究と先人たちの功績を丹念に集め、理工学部とともに歩んだ膨大な歴史を年表にまとめ、最終講義でその成果を含め、今までの大学での研究生生活を振り返りました。

今回は、イタリア留学から帰国後、一貫して小嶋先生に師事し博士學位論文をまとめた工学部の三浦金作先生をインターとして、日大・都市計画系の沿革を縦横無尽に語っていただきました。特に日大の理工学部の創立された経緯や、戦前に学生を巻き込んで起きた騒動、戦争の影響、戦後の復興、学生運動のことなど、どんな先生方がいて、どんな動きがあったのか。当時の建築界の動きや、都市計画の動きなどと絡めつつ、語っていただきました。

今回も山脈図の作成では、注意深く作業を行いましたが、漏れがあったり、不適切な表記があるかもしれません。その際にはご容赦いただき、広報委員や事務局までご一報ください。

(横内憲久／広報委員委員長)

山脈図作成協力／宇於崎勝也准教授

インタビュー

保守本流の都市計画を引き継いで

小嶋勝衛 前日本大学総長・元理工学部長 × **三浦金作** 教授



本年1月25日、理工学部駿河台校舎5号館の輪講室にて

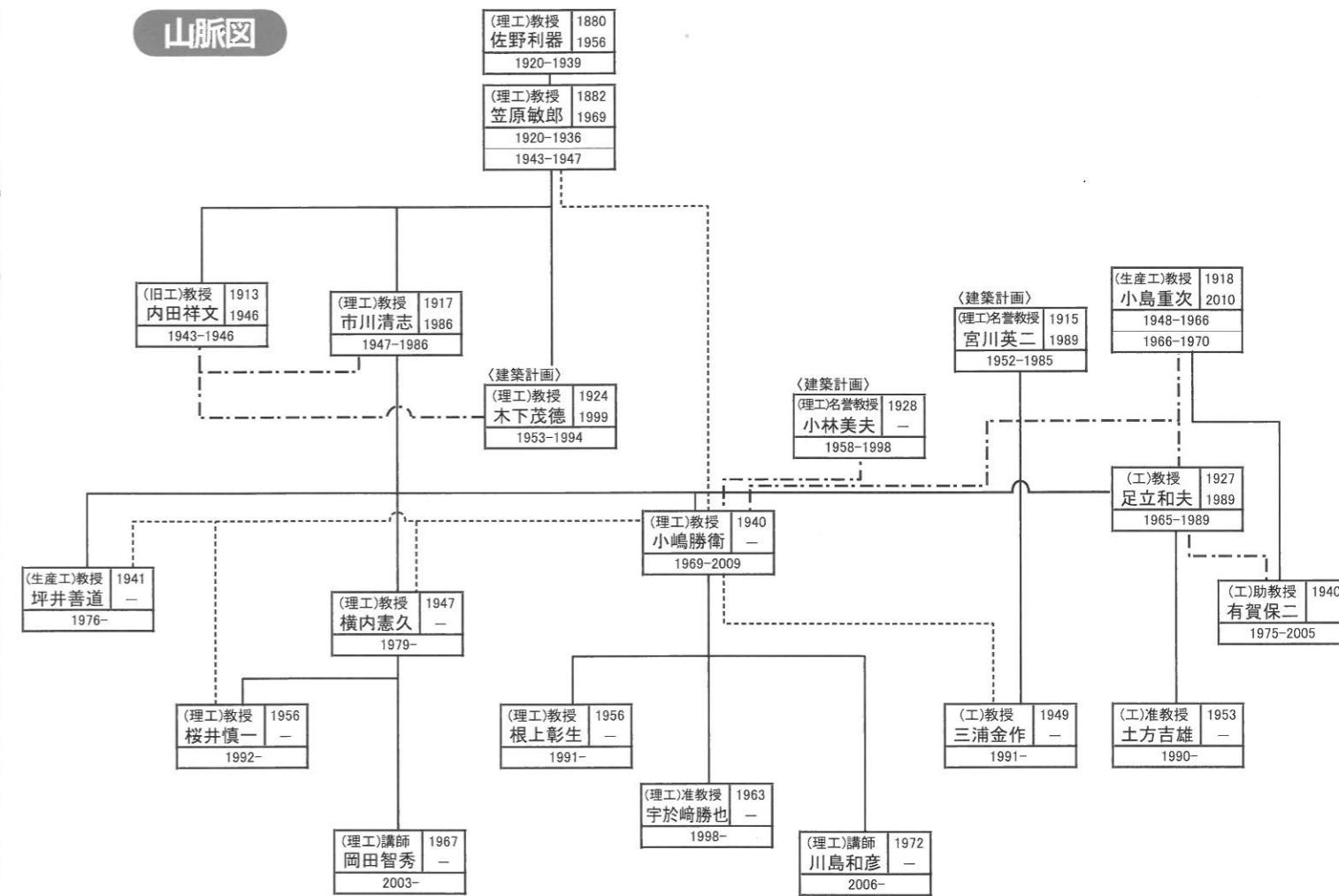
凡例

最終(現)職 氏名	生年 没年	線種
着任-退職 (講師以上の資格で)		系列 学位論文 指導

- 系図作成にあたって・教員名は基本的に専任講師および助教以上の記載
- ・線で結ばれている教員間は卒研および修士・博士論文等の指導関係等
- ・桜建出身で他大学等の教員は除く
- ・誕生年、教員年の空欄は本人の希望および不明

山脈図

西暦
1920 20.06.01 日本大学高等工学校設置
28.04.14 日本大学工学部設置
1930
1940
49.02.21 新制大学に移行 (第二工学部(現・工学部)設置)
1950
58.01.10 理工学部に名称変更
1960
65.01.25 第一工学部(現・生産工学部)設置 66.01.25 生産工学部設置(第一工学部廃止)、 第二工学部を工学部に名称変更
1970
77.12.21 海洋建築工学科設置
1980
84.09. 理工学部建築学科に建築学コース、 企画経営コース設置
1990
92.03.19 大学院理工学研究科に不動産科学専攻 (修士課程)設置 94.03.16 同上(後期)設置
2000
2010



佐野利器が連れてきた笠原敏郎

三浦◎日大の都市計画は笠原敏郎先生が始まりですが、社会にどんな影響を与えたのか、歴代の先生方は何をしてきたのか、どういう人たちだったのか、改めて教えてください。

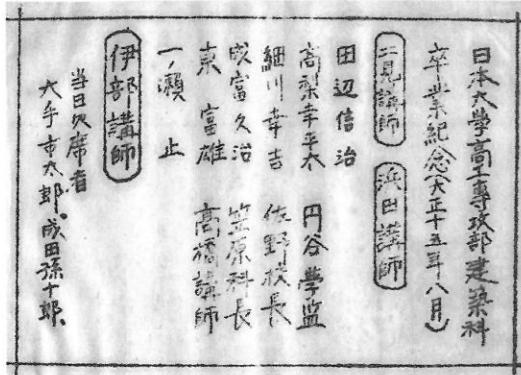
小嶋◎1990年(平成2)に大学史編纂室が『日本大学百年史』第5巻を上梓し、セット完結しました。卒業生や在校生の皆さんのがアイデンティティのために、ぜひ読んで欲しい本です。また理工学部については学部史として、すでにこの5冊(P7)の参考文献を参照が出版されています。

これも必読の書。こうした歴史の中で、39年(昭和14)の学生ストライキに関する記述は、非常に重要な意味を含んでいるのです。

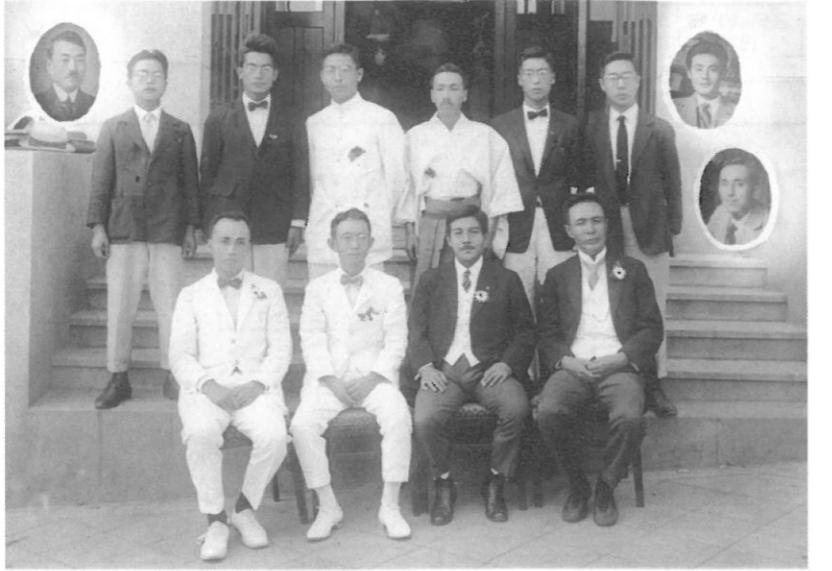
三浦◎それは、同盟休校のことですか。

小嶋◎そう。新任の先生が教室に入ると「起立! 礼! 回れ右!」といって、授業をボイコットする。これは、佐野利器先生が理工学部の前身である高等工学校を創設した時からの経緯が関係したのでしょう。創立当時佐野先生は東大の教授で、新しい形態の学校についての提案をもっていました。その目的は、現場で実務を

している人たちの知識と技術レベルを上げて、日本の工業技術界のリーダーを育成することだったんですね。しかも、国立でやるのではなく私学の日大で実現しようとした。「講義内容や教師人事などを、すべて任せもらえるなら・・・」との条件付きで校長を引き受けたと『伝統と情熱の70年史・日本大学理工学部』の中で語っています。校長となった佐野先生は、内務省技師の笠原敏郎先生を連れてきて建築科長に据えました。講師は当代一流の先生ばかり。そして高等工学校は就労者のために夜間学校からスタート



右は大正15年に行われた日本大学高工専攻部建築科の卒業記念写真。前列右から2番目が佐野利器、左隣が笠原敏郎。上は写真に添えられた先生や卒業生の名前が記されたもの（出典／日本大学理工学部科学技術史料センター（CST MUSEUM）笠原文庫）



したんです。

三浦○2年制でしたね。

小嶋○昼働いていて、夜学びたい人を対象に、土木科、建築科それぞれ30名を募集した。そしたら、全国から何百名も応募が来たそうです。私立学校が工学系の学校をやるには設備などたいへんだったでしょう。その後、高等工学校とは別に28年に工学部、29年に日本大学工業学校が設置されました。戦時体制下の技術者への需要や工学部の経営安定を図る大学当局と、少数精鋭を標榜していた佐野先生との間にずれが生じてきたようです。39年佐野先生が公務で中国へ行っている留守の間に、世田谷に類似の学校をつくって学生募集を始めてしまいました。

三浦○世田谷予科理科ですね。

小嶋○帰国した佐野先生は辞表を出し、大学を辞任してしまった。佐野先生が連れてきた建築学科の先生方16名、他学科、予科を入れると30名以上の先生方も辞めたと伝えられています。学生らは先生を慕って、工学部建築学科を中心に同盟休校という辞任阻止行動を起こすんです。結局、佐野先生は学校を辞任。学生は結果的に卒業したけどね。その佐野先生が顧問として日大に復帰したのは戦後の47年（昭和22）でした。

三浦○笠原先生は建築基準法の基にあたる市街地建築物法をつくった人ですね。都市計画に関しては、20年（大正9）まで総合的見地から取り締まる法律がなかった。

小嶋○そう、19年4月に旧都市計画法と市街地建築物法がセットでできました。それに先立ち日本初の近代都市計画といわれるのが、1884年（明治17）に内務卿山縣有朋に芳川頼正東京府知事が上申した「市区改正意見書」です。それが基になって審査会の計画案が作成され、16条からなる東京市区改正条例が1888年（明治21）公布されます。その後31年間運用され、1919年に初めて都市計画という名前がついた法律ができます。これには土地区画整理や土地収用のことが書いてあるし、市街地建築物法には商業地域や住居地域のことが細かく書かれていて、これが今の建築基準法の基になりました。

三浦○ピッタリですね。両先生は日大の学生で、斎藤先生、加藤先生、市川先生は年齢は近いんですね。そして戦後の学部・建築学科の再建に尽力され、「満州の三羽鳥」といわれたのですね。

内田祥文先生の急逝と市川先生

小嶋○斎藤先生は旧制工学部を35年3月に卒業。加藤先生は40年に卒業し、市川先生は41年3月卒業です。その間にいた内田祥文先生は38年3月の卒業でした。父親は東

大総長の内田祥三先生で、笠原先生と同期。その長男が祥文氏。祥文先生は日大卒業後、東大の大学院に行きます。佐野先生や祥三先生は構造の先生で研究テーマは耐震構造、鉄筋コンクリートだったけど、都市計画法や市街地建築物法の策定・普及に力を入れた人たちでした。祥文先生は不燃化と都市計画を結び、終戦の年に「木造家屋外周の防火に関する実験的研究」で学位をもらう。つまり親子で地震で壊れない建築、火災で燃えない建築による都市づくりを目指したんです。これは東京という都市の悲願だったわけ。

佐野先生は世界で初めて耐震化構造理論を確立したことでも有名ですが、個々の建物以上に街の耐震化という都市計画の必要性も重視していました。日大の都市計画研究室は本来、笠原先生からなんだけど、佐野先生が「都市計画研究会」「東京市政調査会」などで、一所懸命に都市計画の普及に努めていたんです。だから、系譜としては佐野先生、笠原先生、内田祥文先生と市川先生につながるといつても過言ではないと思いますね。

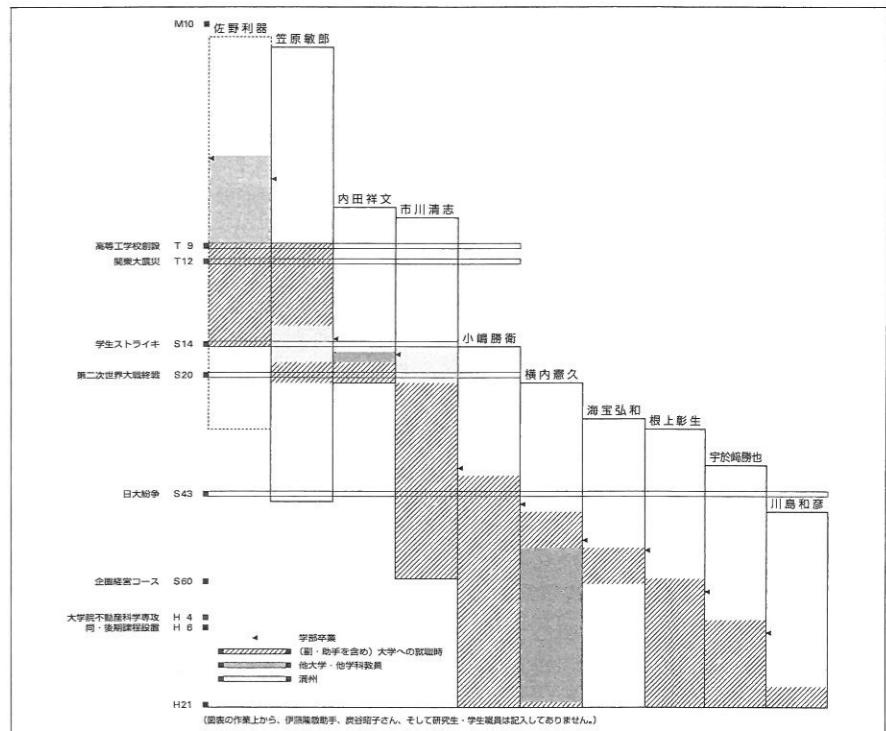
祥文先生は45年（昭和20）に学位をとった後、敗戦後復興のためにたくさんのコンペに応募しました。でもその無理が祟ったのか、翌46年に研究室で倒れ、翌日亡くなってしまう。市川先生は4歳違いの兄貴分だった祥文先生の残された論文を、相模書房に持ち込んで本にしたり、亡くなる直前に応募した帝都復興計画のコンペが一等と特賞をとったので、祥文先生の代わりに市川先生が計画案の解説を書いています。この応募案に参加した学生の中に、若き日の木下茂徳先生（元日大総長・理工学部長）の名前もあるんです。

三浦○木下先生は戦後初の大学院生（旧制）なんですね。研究室は笠原先生でしたか。

はまだ学生でしたね。

小嶋○学部卒業は63年です。私は学部の2年生の時に小林美夫先生から突然電話をいただき、軸組模型の作製を手伝ってほしいといわれて、以来小林先生の研究室に通う生活が始まりました。当時の研究室には4年生の若色峰郎さん、秋元和雄さん、筒井英雄さんらが製図台に向かっていて、活発な事務所のような雰囲気でした。私も研究室に入り浸り、4年生になると、当時三大公開コンペといわれた「国立劇場」「国立国際会議場」「浪速芸術大学」のコンペの応募作品に名前を入れていただき、建築デザインに夢中になっていました。ですから将来は設計事務所に行くことを考えていました。この頃の建築界は海外のスター建築家がダイナミックに動いていました。CIAM崩壊、チーム10の結成、そして丹下健三氏が東京計画、大谷幸夫氏が麹町再開発計画などを発表していました。

そんな時代の空気の中で、私は建築をやるには「都市を勉強しなくては」と思い、市川先生のところへ相



都市計画研究室の専任教員の変遷（出典／『都市計画研究室と私』、『小嶋勝衛先生 最終講義・懇親会』事務局）

談を行ったんです。そうしたら、「卒業研究は私のところへ来るのだろうね。私の都市計画では足らないか」つていわれて。大学院に行きたいといつても、家は経済的に大丈夫かと聞かれ、さらに国家公務員試験上級職（甲種）に合格したら大学院を考えよう、といわれてしまいました。当時、大学院生は2年にひとりの採用でしたからね。

三浦○市川研は公務員試験に通らないと入れないっていうのは、小嶋先生の時に始まったんですかね。

小嶋○当時都市計画は公的機関が行うものという雰囲気があり、民間企業の仕事ではなかった。当時卒業生の多くは民間企業への就職でしたからね。研究室には上の人がいなかつたんです。それに院生も助手もいませんでした。63年に大学院に入ったら院生はひとりで、38名の卒業研究をみなくちゃならない。市川先生はその年に教授になり、同時に学生指導委員長の要職に就き、別の執務室に行っちゃつていましたからね。



1962年度（昭和37）の桜建賞を受賞した卒業研究「住宅地の発展に関する研究」に取り組んだメンバー。一番右は市川先生、右から3番目が小嶋先生。撮影場所は5号館の屋上（写真提供／小嶋勝衛）

時代の画期だった68年の大学紛争

小嶋○その頃、とにかく学生がとても多くてね。卒研生は1部、2部（夜間）合わせて毎年40名くらいいたかなあ。私は66年に助手になりました。市川先生は日大紛争で学生の矢面に立ち激務をこなしていた68年に、体調を崩されて学内で倒れ入院されました。だから私は先生はいないし、当時助手は教室会議に参加できず苦労しました。

三浦○68年といえば新都市計画法ができた年。私は2年生、横内憲久先生は3年生でしたね。

小嶋○それまで学生運動をしているのは見知った学生だったので、次第に知らない人が混ざってくる。激化した時は、1号館の正門を閉じて通用口の前で人間の盾になった。

三浦○1号館の前ですか。

小嶋○そこへ学生がワッショイ、ワッショイやってくるわけ。その向うにビシッと機動隊が待機しているんですね。だけど、こちらがやられないと出てこないんですよ。学生の投石もすぐ近くまで飛んで

きてね。

三浦○歩道の敷石をはずしちゃうんですよね。だから、あそこはアスファルトになったんですね。

小嶋○そうしているうちに、学内の立場によって学生への対応が全然違うこと気に気づく。同じ立場でも、中には「興味ないから」って逃げちゃう人もいたしね。バリケードで封鎖されている最中も助手として学生や学生の父兄などと、いろいろな対応をしてたんです。学生指導委員長の市川先生を辞めさせろ、といった声もあがつたりして、とても厳しい時代でした。授業を再開した時なんか、出席をとると学生が「お前、何やつてんだ？」って話になる。夜中の午前1時くらいに、家へ来られたこともあったなあ。

三浦○それは怖いですね。

小嶋○その頃さ、寺山修司の「書を捨てよ、町へ出よう」がはやっていて、「勉強している場合じゃない」とて。街へ出たら都市計画に役立つと思つた。(笑) 70年代になると、ようやく紛争がおさまつてくるんです。笠原先生が亡くなられたのは、この

大学紛争の終盤でした。

三浦○69年ですね。

小嶋○私が大学院に入ったのは63年だから、市川先生は教授になつたばかりで、未だ大学院で授業がもてず、修士論文は笠原先生に指導していただき最後の弟子になるんです。その2年後に坪井善道先生が修士に進学てきて、彼は市川先生に教わることになりました。

三浦○笠原先生は実際、どんな方だったのですか。

小嶋○木下先生をよくからかってね。木下先生が笠原研の旧制大学院生だったからかなあ。学生にはもの静かな好々爺でしたけど、都市計画の歴史を背負っているから、前川国男氏などが研究室に意見を伺いにきたりして、すごい存在でした。

話をちょっと元にもどします。紛争の時、生産工学部の小島重次先生の研究室がなくなってしまった。それで市川先生と私がお互い週1回兼任で、生産工学部に都市計画の講義へ行っていたんです、何年間か。もちろん理工の授業もあって、二部（夜間）もありました。

三浦○それは忙しかったですね。

小嶋○だから採点時期がひどいの。記述式で1000人分もあるから。さらに学部の入試作業にもあたつていたので、すごかつたよな。

オブザーバーとして同席していた
横内先生に話しかける。

横内○やつても、やつても、減らないんだもの。答案用紙の持ち帰りが禁止なので、遅くまで研究室で採点していましたよね。

今年で理工学部は90周年ですが、都市計画研究室も90周年を迎える

小嶋○家に帰れないし、とにかく眠かったよね当時は。

横内○小嶋先生いつ寝ているんだろう、と思ったもの。授業はいっぱいあるし。

小嶋○理工学部の講義は連名だったけど、忘れられないことを市川先生にいわれてね。「都市計画の面白いところは若い君に任せる。面白くないところは年寄りの私がやろう」っていうの。ところが、面白くないところなんかないでしょ。

三浦○市川先生、上手ですね。

一緒に研究する後継者を育てる

小嶋○一度、近江栄先生のお供で、都市計画の大家高山英華先生のお話しを聞きに行ったことがあるんです。日大の事情をよくご存知で、その時に、市川先生と私の年の間を埋めてくれる先生はいないものかと考えてくださいました。

でも結局見当たらなくて、「あなたは、まず後輩を育てなさい。そして、その人と一緒に研究しなさい」と。これには若干ショックを受けましたけど、不要な迷いを捨て、後輩を育てようと覚悟しました。

三浦○先生は郡山の工学部にも1990年から2005年まで、15年も通つて大学院の論文指導をしておられます。工学部の学生は、この指導をデスマッチついていましたよ。テーマを外堀から埋めていくつて、ビシッと理詰めで攻めてくるから。

Kojima Katsue
1940年東京都生まれ。63年日本大学理工学部建築学科卒業、65年同大学院修了後、助手、助教授などを経て、83年教授。97年理工学部長、翌98年、2001年副総長、05年から08年まで日本大学総長、理事長を歴任。09年定年退職。工学博士。現在、千代田区都市計画審議会会長、船橋市都市計画審議会会長など社会活動多数。日本工学教育協会会長、地域マネジメント学会顧問、日本学术会議連携会員、日本工学アカデミー会員など幅広く活動を展開する。

Miura Kinsaku
1949年福島県生まれ。71年日本大学理工学部建築学科卒業、73年同大学院修了後、山下設計入社。78年イタリア政府給費留学生としてミラノ工科大学留学。91年日本大学工学部専任講師となり、助教授を経て2004年より教授。工学博士。専門は都市景観、街路・公共空間。主な論文は「イタリアの広場の空間構成に関する研究」、「街路空間における探索歩行時の注視に関する研究」ほか、著書に『都市と広場』、『広場の空間構成』など。

わけです。先生はそのほぼ半分の45年いたことになりますね。

小嶋○だからね、対外的にうちの研究室の最大の不幸は、研究者の層に断絶があったということだと思うんです。しかし、たくさんの学生を指導する環境に恵まれて、理工学部の建築学科、海洋建築工学科、工学部、生産工学部にも都市計画の同僚が広がり、お互いに都市計画の話ができるることは、たいへん嬉しいことです。三浦○先生は主査として、博士学位取得者22名を国内外に輩出し、本当にたくさんのがんばりました。今までの流れをみると、佐野利器先生を始め、笠原先生、市川先生といった、都市計画の草創期からの保守本流の流れを汲む先生方にずっと恵まれていたんですね。そして断絶があったにも関わらず、現までそれを受け継いでいることを改めて感じました。

本日は長時間にわたり、本当にありがとうございました。また、この続きを聞かせてください。



参考文献

- 『日本大学理工学部五十年史』 発行／日本大学理工学部、1973年3月
- 『伝統と情熱の70年史・日本大学理工学部』 発行／日本大学理工学部、1990年2月
- 『歩・桜門建築会70年の歩み』 発行／桜門建築会、1991年3月
- 『佐野利器と日本大学高等工学校』 発行／桜門建築会、2000年10月
- 『都市計画研究室の記録』 発行／「小嶋勝衛先生 最終講義・懇親会」事務局、2009年9月

研究テーマ **自然環境と親水性に配慮した海浜空間の創成—最先端の海浜地形予測シミュレーション手法と海浜再生技術の開発**

研究室名 沿岸域工学研究室（小林研究室）

教員名 教授・小林昭男

キーワード 海浜地形調査／海浜地形変化予測／侵食対策／海浜再生技術

企業等への要望 □共同・受託研究の要請 □計画・設計等の協力 □研究成果の事業化等

□その他（行政・企業との連携によるプロジェクト立案）

研究概要

海洋空間における砂浜は、レクレーションなどの人間活動が活発な場であり、海洋建築の立地として良好な環境を有することが望されます。しかし、海岸侵食として一般にも知られるように砂浜の減少が著しく、海浜周辺の建築に対する越波・浸水被害などが生じています。砂浜の減少は生物の生息環境にも影響を及ぼしており、豊かな自然環境が少なくなっています。そこで多くの侵食対策が講じられてきましたが、侵食が止まるることは希です。良い対策の立案には侵食要因の十分な解明が必要であり、そのためには十分な現地調査と優れた海浜地形シミュレーション手法が必要です。

そこで本研究室では、数多くの現地調査結果に裏付けられた海浜変化の数値モデルを開発し、実現象をよく再現するシミュレーション手法を開発しています。これは波浪による流れと海浜の砂の粒度組成を考慮して、海浜地形の経時変化を高精度で予測する手法です。一方、侵食して砂がまったくなくなった海岸に砂浜を取り戻すために、構造物の建設をともなわない次世代型の海浜再生技術の開発に着手しています。これは、侵食された海岸に侵食対策として礫を敷設した後に砂が堆積した現象に着目したもので、そのメカニズムを解明し、砂が堆積する条件を整理して新たな海浜再生技術として確立することを試みています。



左の写真は礫の敷設直後の様子。右は10ヶ月後に自然の力で砂浜が再生したところ

連絡先○理工学部海洋建築工学科船橋校舎13号館6階 Tel 047-469-5281 E-mail 小林昭男／kobayashiakio@nihon-uac.jp

研究テーマ **戦後の建売住宅・住宅地の計画及び維持管理に関する研究**

—公共空間の保全状況を良好に保持する手法に関する研究—

研究室名 曽根研究室・亀井研究室

教員名 教授・曾根陽子／専任講師・亀井靖子

キーワード 建築計画／公共空間／保全／維持管理／公園トイレ

□共同・受託研究の要請 □実作・試作等の協力

□研究成果の事業化等 □その他（ ）

研究概要

亀井研究室は今年度から始まり、曾根研究室は来年度で終了する研究室です。これまで一緒に行ってきた研究テーマは「建売住宅・住宅地の計画及び維持管理に関する研究」です。今年度から別々の研究室としてスタートしましたが、現在共同で行っているテーマは「公共空間の保全状況を良好に保持する手法に関する研究」です。公共空間は初期投資だけでなく、良い状況に維持・保全するための費用をかけなければ、どんなに立派な建築でも不快な空間になってしまいます。バブル崩壊後、建築は「新築からストック」の時代へ変わったといわれていますが、ストックの運用や保全に関する研究は極めて少なく、その蓄積も微々たるものです。今年度私たちは公共空間の中でも特に地域住民と直接関係し、保全状況に差のある公園と公園トイレを取り上げ、清掃・管理・警備・利用・更新といった保全状況について調査を行っています。

連絡先○生産工学部建築工学科津田沼校舎4号館4階 Tel 047-474-2537(曾根研究室) / 047-474-2507(亀井研究室)
E-mail 曽根陽子／soneyoko@nihon-uac.jp、亀井靖子／kameiyasuko@nihon-uac.jp

訃報

昨年、長きにわたり理工学部建築学科で教鞭を執った小野新先生、榎並昭先生、小谷喬之助先生が逝去されました。長年研究や学校生活と共にされた先生方に、追悼の文を寄せていただきました。

小野新先生

元理工学部建築学科助教授



小野先生は昨年3月9日、肺炎にてご逝去されました。享年81歳でした。先生は、数年ほど前に上腕骨の骨折に始まり、腰の圧迫骨折、リハビリと入退院を繰り返していました。もともと華奢なお体でしたので、歩行が思うようにならなくなつてから体力が次第に衰えていったことが原因でした。告別式は3月12日、多数のご友人や卒業生が参列し、しめやかに執り行われました。

11月には小野研究室および海洋建築の安達・中西研究室の卒業生の会、「新会」のメンバーが集い、「小野先生を偲ぶ会」を行いました。この「新会」は、40年以上前から、先生を慕う研究室のOBが毎年暮れに集まり旧交を温める会ですが、在りし日の小野先生を偲んで、お酒を酌み交わしながら賑やかに先生との想い出話に花を咲かせました。今さらながら、先生の若い人を愛する気持ちや、どんなことにでも許容していただけた先生の慈愛に満ちた心の広さに深く感謝する次第です。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(中西三和／理工学部海洋建築工学科教授)

榎並昭先生

日本大学名誉教授



日本大学名誉教授で日本建築学会および土質工学会（現地盤工学会）の元副会長の榎並昭先生は、昨年4月2日に逝去されました。享年82歳でした。

先生は、1997年に定年退職するまで46年有余を本学の学術研究、教育指導にご尽力されました。退職後日本大学名誉教授の称号を授与され、2007年11月には永年の教育研究の功労に対し瑞宝中綬章を受章しました。建築構造を専門とし、鉄筋コンクリートの折板構造に関する工学博士の学位論文は高い評価を受け1961年度日本建築学会賞（論文）を受賞。さらにテルツァーギ・ペックの名著「新版・土質力学」の共訳は先駆的な研究業績として評価され、1969年度土質工学会の功労章を受章しました。

先生は第二次世界大戦中、陸軍幼年学校から予科士官学校、航空士官学校と約5年半、軍の将校になるための教育を受けられたそうです。先生は教え子の前では多くを語りませんでしたが、いつも陸軍の将校らしく姿勢を正し、自らを律し範を示して指導する教育者でした。最後に、先生の生前のご業績とご指導に深く敬意と感謝を表するとともに、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(安達俊夫／理工学部建築学科教授)

小谷喬之助先生

日本大学名誉教授



小谷先生が、昨年7月28日ご逝去されました。享年83歳。前立腺癌が悪化し、5月元の病院に急速入院されていましたが、エレベーターのない自宅マンションでのひとり暮らしにもどるのは困難ということで、緩和医療のある広尾の病院に移っていました。お見舞に伺い、ドイツの古い劇場巡りをしてきた話をすると、「もう少し若かったら自分ももう一度地中海に行けるのになあ」と言って空を眺めっていました。「白鳥の歌：影法師Doppelgänger」と表書きされたノートには、その時々の思いが書かれていて、お見舞いの折に見せてくれました。帝国ホテルのサンドウイッチやワイン、饅弁当など美味しい食べている姿を見ていたので、突然の訃報は大変ショックを感じました。それまでも辛そうな様子を見たことがなく、最後まで意識がはっきりしており、ご家族や元助手の尾中さんにお別れされての旅立ちでした。

先生は、設計方法や劇場建築分野において指導的な立場を築かれ、特に、新国立劇場の原案作りから実現に至る貢献、わが国の劇場技術振興を目指した劇場演出空間技術協会の設立・運営は代表的な仕事としてあげられます。ご遺族に哀悼の意を捧げるとともにご冥福をお祈り申し上げます。

(本杉省三／理工学部建築学科教授)

トピックス○第1回桜門建築会学生設計コンペティション結果報告

昨年の12月12日、審査員に建築家の伊東豊雄氏を招き、「第1回日本大学桜門建築会学生設計コンペティション」を開催した。桜建会では、「桜門建築会学生設計コンクール」として、各学部・学科の交流を視野に入れた事業を1984年から98年まで隔年で8回開催してきた。今回のコンペティションは、かつてのコンクールを引き継ぎ、11年ぶりに復活したものである。

伊東豊雄氏がテーマ設定

「第1回日本大学桜門建築会学生設計コンペティション」は、日本大学・大学院に在籍するすべての学生を対象に行われ、この企画にふさわしい気鋭の建築家として伊東豊雄氏に審査員を依頼し、快く承諾していただいた。テーマについても、伊東氏のアイデアにより「未来の住処(すみか)をデザインする」に決まり、実際の敷地を想定した設計を行うこととなった。そして、伊東氏自身も参加した栃木県宇都宮市に建設された実験住宅プロジェクト「SUMIKA Project」の延長として、《自然環境との関係をテーマとした新しいライフスタイルが強くイメージされ》た、《無機質で抽象的な空間ではなく、動物

的な本能に訴えかけるプリミティブな住空間》に対する提案が求められた。選ばれた計画敷地も、「SUMIKA Project」で西沢大良氏、藤本壮介氏が設計した住宅に隣接する場所であることから、それら2つの住宅とどう関係づけるかも提案の重要なポイントとなった。

夏季休暇前に募集要項が発表され、11月4日の締切までに各学部・学科より110点の応募があった。今回は、工学系の学部・学科だけでなく、藝術学部や生物資源科学部にも広く声を掛け、全日大のイベントとなることを目指した。また、応募に際しては、学部生はグループによる応募を認めだが、大学院生は個人応募に限った。

時間をかけた審査

第1次審査では、応募者がAIサイズの図面1枚にまとめた提案を、伊東氏が長時間にわたって応募作品の1点1点をじっくり読み込んで審査を行い、110作品から第2次審査に進む10作品を選出した。そして選出者には改めて1/50の模型と5分間のプレゼンテーションが要求された。

第2次審査は、12月12日に理工学部駿河台キャンパスCSTホール

を会場に公開で開催され、多くの学生が詰めかけた。公開審査では伊東氏だけでなく、今回の計画敷地に隣接した住宅「宇都宮のハウス」を設計した西沢大良氏、伊東氏とともに「SUMIKA パビリオン」の設計を担当した伊東豊雄事務所の東建男氏にもコメントーターとして参加していただいた。

第2次審査は応募者のプレゼンテーションに対し、伊東氏や西沢氏、東氏から厳しい質問が飛び交い、会場は緊張感があふれた。応募者だけでなく、その場に立ち会ったすべての学生にとって、世界的に活躍する建築家の伊東氏自身がどのような観点から応募作品を選び、さらに今回のプレゼンテーションに対して何を求めているのか、その思考を垣間みる非常に貴重な機会となった。

そして、今回は公開審査だけでなく、「My Personal History in House Design」と題した伊東氏によるショートレクチャーも行った。タイトルが示すとおり、伊東氏の幼少期の写真から始り、これまで設計を行ってきた住宅作品に焦点をあてた、個人史とも呼べる内容であった。建築家を目指す学生たちにとって、大きな刺激となつたであろう。

テーマ/未来の住処(すみか)をデザインする

佐藤慎也／学生設計コンペティション実行委員会委員

公開審査とレクチャーの後、会場をカフェテリアに移して懇親会を行い、その席上で伊東氏によって入賞作品が発表された。入賞者決定にあたって、コメントーター2人の意見を聞きつつも、最終的には伊東氏自身が悩み抜いた上で結論を出した。学生のコンペであるにも関わらず、伊東氏の真摯な態度に感服する場面であった。

伊東氏の講評

最優秀賞は、重野陽祐君、清水良輔君、鈴木章弘君の理工建築3年のグループによる「ametomo」であった。この作品は、切妻状の形をもつ閉ざされた空間に対し、同形の切妻状のガラスを覆い被せることで、外と中をガラスで連続させるとともに、開放された空間と閉ざされた空間が内部に生み出されている。そして、ガラスの勾配屋根をもつ内部では雨天時に水滴がガラスの屋根から壁へと伝わる様子を見ることができ、《雨とヒトのいい“カンケイ”をつくる》詩的な提案だった。講評の中で伊東氏は、第2次審査に進んだ作品の中で、唯一、西沢氏の住宅との関係を考えており、敷地にもつともきれいに納まっていると評価し

た。非常に単純な形態ではあるが、西沢氏の住宅に向けて開いたガラスの屋根と、その中に入れ子状に大空間があるという関係がおもしろいと評した。

続く優秀賞2点の評価は最優秀賞作とは微差であり、どれが最優秀でもおかしくなかったと伊東氏からコメントが付き、理工学院2年の松岡伸明君と理工建築4年の中山友希さんとの作品が選ばれた。

「サンカクの木屋」と題された松岡案は、ツリーhausをモデル化した木屋と呼ばれる三角錐の内部空間を、森をつくり出すように林立させたもの。ガラスに囲まれ、三角錐が並ぶ1階が魅力的ではあるが、伊東氏は力強い模型を評価した一方で、一番おもしろい三角形の宙に浮いた内部が十分に考えられていないのが残念とコメントした。

「森と森の居候」と題された中山案は、敷地全体に森のように植えられた木々を縫うように、1枚の壁が折れ曲がり内部と外部を隔てた提案。伊東氏は、コンセプトも清々しく、きれいな提案であったと評価した一方で、模型を見ると内部と外部がはつきりと分かれてしまっていることが残念だったとコメントした。

上位3作品の他に、「SUMIKA Project」を主催する東京ガス株式会社より早川光毅氏、小屋かおり氏をゲストに迎え、「東ガス SUMIKA 賞」を選出していただいた。受賞作は、理工海洋建築4年の細矢祥太君、益山未樹さんグループの作品「とりどりの住処」。回転する壁により、さまざまな内部空間が生み出されるもので、伊東氏も非常にさわやかできれいな提案と評した。なお、第2次審査に進んだ他の6点には佳作が贈られた。

「桜門建築会学生設計コンクール」から11年ぶりに復活したコンペであったが、伊東豊雄氏を審査員に迎え、応募作品が100点を超えるとともに、内容も非常に充実したものであった。

懇親会の席では、片桐正夫会長よりこれを機会に毎年開催する予定であることが告げられた。次回の第2回では、さらに多くの学生からの応募を期待している。

末尾ながら、審査員をつとめていただいた伊東豊雄氏、コメントーターの西沢大良氏、東建男氏、協賛の東京ガス株式会社には心よりお礼を申し上げます。

コンペティション審査結果

最優秀賞／重野陽祐、清水良輔、鈴木章弘(理工建築3年)

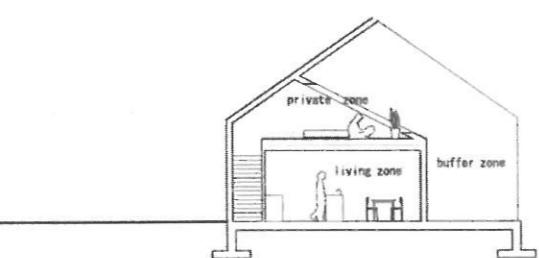
優秀賞／松岡伸明(理工建築M2)、中山友希(理工建築4年)

東京ガス SUMIKA 賞／細矢祥太、益山未樹(理工海建4年)

佳作／谷田一平、稻毛康二郎、中村隆法(理工建築2年)、倉又式子(理工建築M2)、景山悠、鳥居智之(理工建築3年)、荒井亮蔵(理工建築M1)、伊澤享、鈴木大志、永嶋竜一(理工建築3年)、椎橋亮(理工海建M1)

応募総数／110点 内訳／理工建築90点、理工海建10点、生産工6点、工3点、藝術1点

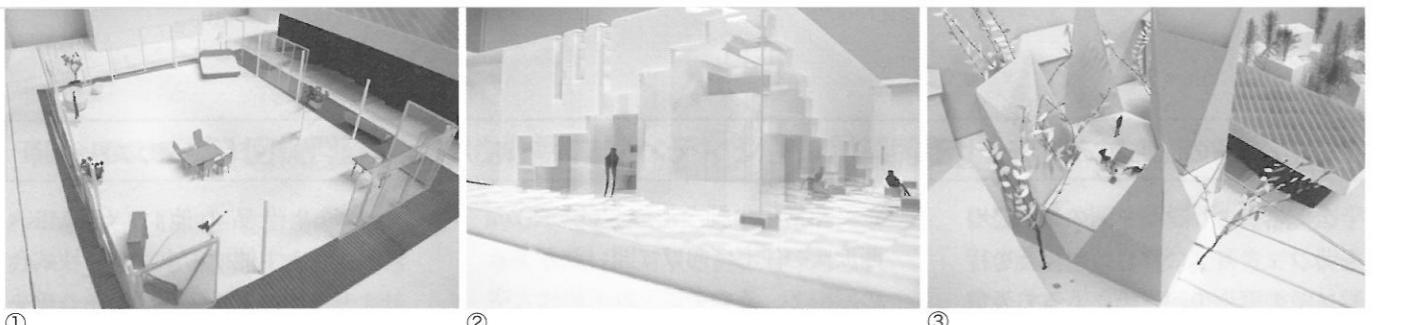
*最優秀賞、優秀賞、東京ガス SUMIKA 賞の4点は表紙に、佳作の6点は次ページに写真を掲載しました。



最優秀賞の作品「ametomo」の断面図



左上／第1次審査通過者によるプレゼンテーション。左下／審査員。左より伊東豊雄氏、西沢大良氏、東建男氏。右上／公開審査と同時に行われた伊東氏によるショートレクチャー。左下／懇親会で記念撮影をする最優秀賞のグループ



①「住民は沈む」伊澤享、鈴木大志、永嶋竜一（理工建築3年）、②「...nomad 遊牧的生活領域可変説」谷田一平、稻毛康二郎、中村隆法（理工建築2年）、③「ネオスミカ」倉又式子（理工建築M2）、④「チクワの家」荒井亮蔵（理工建築MI）、⑤「自然を建築にするとき」景山悠、鳥居智之（理工建築3年）、⑥「大きい部屋と遠い部屋」椎橋亮（理工海建MI）

事務局だより

事務局移転のお知らせ

桜建会事務局は、本年2月に理工学部5号館7階内で移転しました。部屋番号は574Aです。電話番号と

FAX番号は以下の通りです。
電話 03-3259-0649
FAX 03-3292-3216

会員の皆さまの情報提供のお願い

当会のホームページ(<http://www.okenkai.jp/>)には「会員だより」とい

うコーナーがあります。ここでは会員の皆さまの同窓会のお知らせや、講演会、著作物等のご案内を掲載して、より多くのOBの方々へお知らせしたいと思っております。ふるって事務局までメール、FAX等で情報を寄せくださいますようお願いいたします。

します。

また、当会正会員、あるいは特別維持会員で、同窓会開催などのために情報が必要な方は、所定の手続きがあればご提供することが可能です。詳細については、事務局までお問い合わせください。

新入特別維持会員のご紹介

新規入会者 氏名／卒業年／勤務（平成21年11月21日～平成22年2月25日）2名

坂倉竹之助 理工建-45 坂倉建築研究所 寺久保恒夫 工-48 総合積算

桜建会報 No.87 2010-March
発行人 片桐正夫
編集 桜門建築会広報委員会
〒101-8308 千代田区神田駿河台1-8-14
日本大学理工学部内

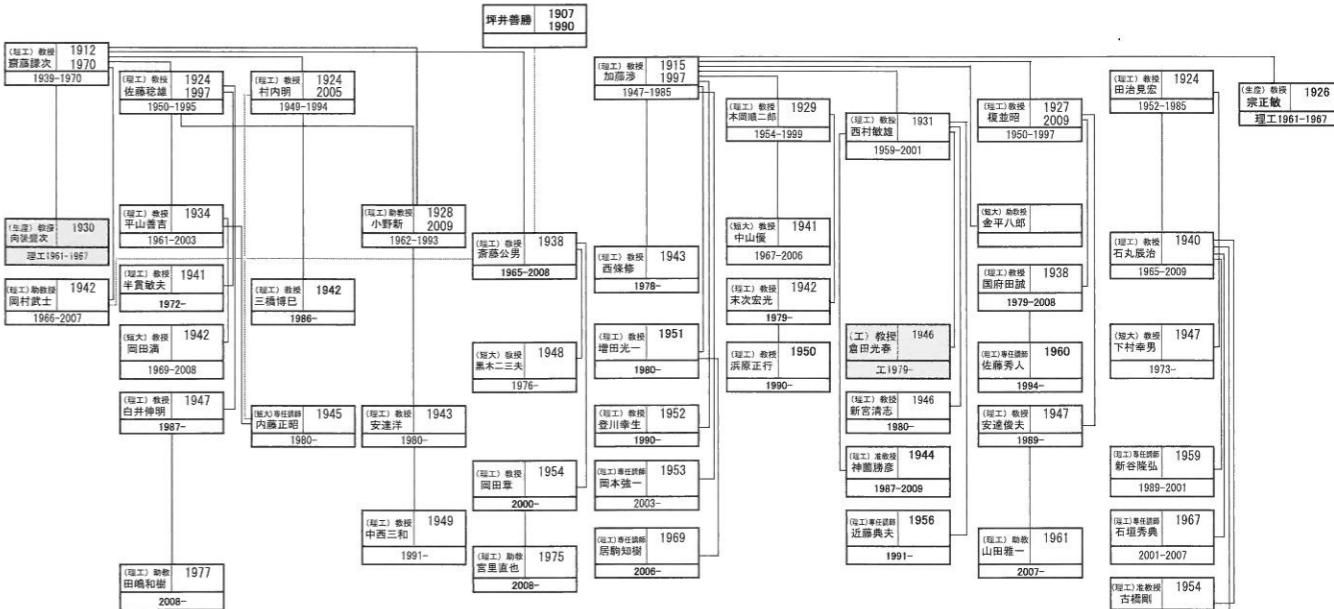
広報委員会
委員長 横内憲久(理工学部建築学科)
副委員長 広田直行(生産工学部建築工学科)
委員 佐藤慎也(理工学部建築学科)
山本和清(理工学部海洋建築工学科)
塙川博義(生産工学部建築工学科)
サンジェイ・パリーク(工学部建築学科)
羽入敏樹(短期大学部建設学科)
西山麻夕美(フリー編集者)
平野香奈子(千葉県庁)
五十嵐賢博(総建築研究所)

桜建会事務局
住所・所属の変更、クラス会の開催、投稿、会費、名簿など桜建会全般についてお気軽にご連絡、お問い合わせください。
理工学部5号館7階574A号室
TEL03-3259-0649 FAX03-3292-3216
E-mail kaiin@okenkai.jp
ホームページ <http://www.okenkai.jp/>
専任／庄野弘子
非常勤／関根光枝、星野麻衣子
業務時間／AM10:00～PM5:00(月～金)

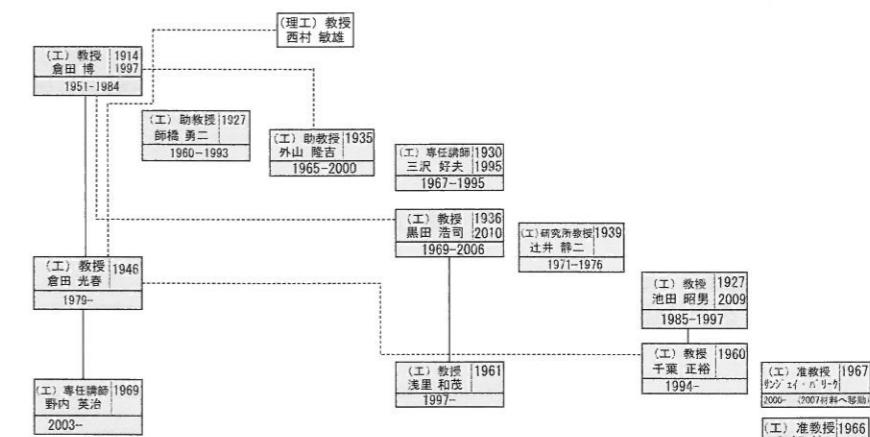
お詫びと訂正

前号に掲載しました日大建築山脈【構造系】の山脈図にいくつかの誤りが寄せられました。ご指摘に感謝するとともに、関係者の方々にお詫び申し上げます。ここにご指摘いただいた部分を訂正した山脈図を再度掲載いたしますのでご確認ください。

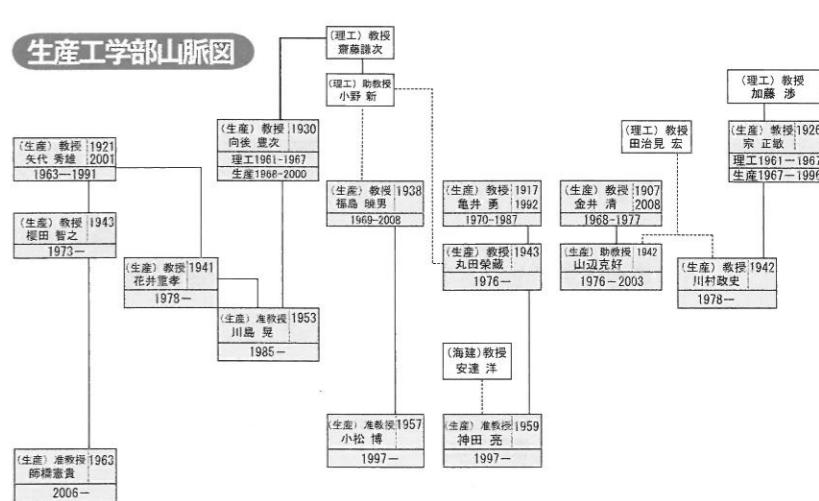
理工学部山脈図



工学部山脈図



生産工学部山脈図



斎藤賞・加藤賞・桜建賞 2009年度受賞者一覧 *受賞作品の紹介は次号に掲載いたします

斎藤賞

- 安達一喜 (理工学部建築／修士論文)
「非弾性ねじれ変形を考慮した偏心RC構造物の終局限界性能に関する研究」 指導／教授・白井伸明
- 来栖真弓 (理工学部建築／修士論文)
「インパルス対応における時系列構造の特徴抽出による室内音場の拡散性評価」 指導／教授・井上勝夫、准教授・羽入敏樹
- 西 将志 (生産工学部／修士論文)
「空気流体中で応答する三次元正方形角柱の発振風速推定に関する研究（付加質量効果に基づく推定）」 指導／教授・丸田榮藏、准教授・神田亮
- 高木 韶 (工学部／修士論文)
「アーケードのある街路空間における来街者の歩行経路と行動パターンに関する研究」 指導／教授・三浦金作

加藤賞

- 堀内 晴 (理工学部海建／修士論文)
「動的載荷時における鉄筋コンクリート造柱の軸力保持能力に関する実験的研究」 指導／教授・安達洋、教授・中西三和
- 小林 史弥 (理工学部海建／修士論文)
「水辺の空間特性を活かした屋外広告物の設置方策」 指導／教授・櫻井慎一

桜建賞

- 小宮圭太 (理工学部建築／卒業論文)
「ディンプルを有するジオデシック・ドームの構造特性に関する基礎的研究」 指導／教授・岡田章
- 郭 鈞桓、長谷川武男、廣谷直也 (理工学部建築／卒業論文)
「パンタグラフ機構によるD.M.同調システムに関する基礎的研究」 指導／准教授・古橋剛、助教・秦一平
- 上石 豪、浅野克也 (理工学部建築／卒業論文)
「継続的な運動トレーニングが脊髄損傷者の温熱環境適応能力に及ぼす影響に関する研究」 指導／専任講師・蜂巣浩生
- 森田有貴 (理工学部建築／卒業論文)
「公開空地の空間特性と利用実態に関する研究－東京都千代田区を対象として」 指導／教授・本杉省三
- 又來由佳 (理工学部建築／卒業論文)
「首都直下地震における帰宅困難者の避難場所に関する研究－高層建築物の地下空間に着目して」 指導／教授・三橋博巳

- 池上晃司 (理工学部建築／卒業設計)
「中野マニア／中野ブロードウェイ増築及び展示、保存施設の付加」 指導／准教授・佐藤光彦
- 石井健人 (理工学部海建／卒業論文)
「ウォーターフロントの景観に調和する保存船舶の展示方法に関する研究－全国の34隻を対象とした調査－」 指導／教授・桜井慎一
- 細矢祥太 (理工学部海建／卒業論文)
「庭防に住もう－新堤防設置計画に伴う集合住宅の提案－」 指導／教授・坪山幸王、専任講師・佐藤信治
- 中山貴博 (理工学部海建／卒業論文)
「垂直翼型ダリウス水車の性能に与える2基配置の影響に関する基礎的研究」 指導／教授・増田光一、専任講師・居駒知樹
- 須賀一裕 (生産工学部／卒業論文)
「強震観測及び微動観測に基づく建物振動性状の把握と評価法の検討～37号館振動特性～」 指導／教授・櫻田智之

田島太郎、鳥海和也 (生産工学部／卒業論文)

「連力図法によるエッフェル塔基礎構造のかたちと応力の関係に関する考察」 指導／教授・花井重孝、准教授・川島晃

中川大輔 (生産工学部／卒業論文)

「Google マップを用いた木造住宅の簡易な耐震診断法に関する研究」 指導／准教授・神田亮

大沼慈佳 (生産工学部／卒業設計)

「難民都市-500人のシェアハウス-」 指導／准教授・岩田伸一郎

清水信吾 (生産工学部／卒業設計)

「季節とともにかわる建築」 指導／教授・浅野平八

早川真介 (工学部／卒業設計)

「街角大学建築学科-キャンパスを捨て街へ出よう-」 指導／専任講師・浦部智義

小林史明、斎藤耕一、趙敏浩、信田大輔、三嶋謙裕、成田誉宜 (工学部／卒業論文)

「アルミ单層ラチスドームに関する実験的研究」 指導／専任講師・野内英治

関根圭祐 (工学部／卒業論文)

「高性能遮熱塗料の開発」 指導／教授・出村克宣

高宮知美 (工学部／卒業論文)

「高梨幸平太と日東紡績諸建築に関する研究－木造建築物におけるデザイン要素の洋風化-」 指導／教授・狩野勝重

佐藤慧介、鈴木聖太 (工学部／卒業論文)

「郡山中心市街地の自転車利用促進に関する調査研究」 指導／准教授・土方吉雄

小林 聰 (短期大学部／卒業制作)

「廃校になった木造小学校の耐震改修-直して使い続ける縁の心-」 指導／専任講師・酒匂教明

澤田瑛那 (短期大学部／卒業制作)

「Sanya Concert-都市と育む子どもの居場所-」 指導／教授・小石川正男

学部ニュース

理工 海洋建築工学科トピックス

- ◎新宮清志教授は2009年11月13日、日本工学会の創立130周年記念式典で、フェローの称号を授与された。
- ◎09年7月18日発行の朝日新聞(朝刊be版)に桜井研究室で行っている「海岸景観に調和した擬岩の適正利用に関する研究」の研究成果の一部が紹介された。
- ◎09年7月17日～19日、山形県酒田市の東北公益文科大学で開催された09年度日本沿岸域学会全国大会第22回研究討論会で、大学院海洋建築工学科専攻桜井研究室所属の小林史弥君(M2)の論文「水上バス乗船所の複合開発整備に関する研究」と月山茂君(M1)の論文

理工 建築学科トピックス

- ◎斎藤公男名誉教授が、シェル空間構造学会(IASS)2009で、空間構造の構造デザインの分野で顕著な業績をあげ、またIASSの発展に大きな貢献をした個人に贈られる「エドワルド・トロハ賞」を受賞した。
- ◎橋本明子さん(岡田研M2)と竹本孝輔氏(岡田研08年度修了)が、09年度日本建築学会大会シェル・空間構造部門で優秀発表賞を受賞した。



海洋建築工学科トピックス

◎坪山・佐藤(信)研究室の爲季仁君(MI)と鈴木啓史君(研究室OB、現在フリー)が第七回「眞の日本のすまい」(主催／住宅産業研修財団、共催／住宅保証機構、生涯学習開発財団、日本建築士会連合会)提案競技で、応募総数250余点の中から、優秀賞である日本建築

士会連合会会長賞を受賞した。課題は、家族との絆や伝統文化の復権に加えて、今回は地域の気候風土との調和を重視し、「生まれたところ」や「住んでいるところ」など、「肌身で感じ気候風土にふさわしい」「日本の伝統を活かした」住まいがテーマとなった。



▲第七回「眞の日本のすまい」優秀賞の「外観」(左)と「土間格子と居間」(右)



「第6回日韓学術交流シンポジウム」を海洋建築工学科で開催

本年1月23日、毎年恒例になった韓国海洋大学校海洋空間建築学部と理工学部海洋建築学科の「海洋建築および沿岸域利用に関する日韓シンポジウム」を開催した。滝戸理工学部長の歓迎のあいさつの後、基調講演から始まり、学生諸君のポスターセッション、両国

教員による研究発表会と盛りだくさんの内容だった。次年度入学が内定している高校生や父母を含め150名を超える参加者を集め、盛会のうちに無事終了した。また、懇親会では両国の教員が交流を深めるとともに、大学院生を交えて和やかに歓談した。



◆上は、日韓学術交流シンポジウムで行われた、ソン・ハチョル氏の講演。下は、参加者で賑わった学内のパネル展示風景

▼左は改修を終えた駿河台校舎5号館。右は池田君、荒井君の「みんなの大きな家」



トピックス

◎大学院生の北井仁志大君(M2・若井研)は、インテリア産業協会主催、住まいのインテリアコーディネーションコンテスト2010(主催／インテリア産業協会)学生プランニング部門で、応募総数546作品の中から奨励賞(10作品)を受賞した。受賞作品報告会は本年3月14日に仙台メディアテークで開催した。



建築学科トピックス

◎池田真人君、荒井亮蔵君(横河研 MI)の「みんなの大きな家」が、「第1回わたしの住みたい夢のECOハウスデザインコンペティション アットホーム賞」(主催／日本賃貸住宅管理協会)を受賞した。

◎08年に改修が行われ、現在は建築学科棟として使用している「日本大学理工学部駿河台校舎5号館」が、「第19回BELCA賞ベストリフォーム部門」(主催／建築・設備維持保全推進協会)を受賞した。この賞は優良既存建築物を表彰するもので、59年に竣工した「ニューブルータリズム建築」の代表作に対する改修が、「耐震性の向上」を主目的として、その建築の存在意義と歴史的継続性を担保しながら、現代の最先端技術としてるべき現代建築の意義を表明するものと評価された。